



書法集
下

中村俊定文庫
文庫 18
735
2





下巻目録



紫陽花や一	本の下り二
秋香乃三	八九四
秋立乃七	夜のあや六
ふり賣の九	猪藪乃十
いさゝき十一	新麦ハ十二
惟子ハ十三	十三夜 十四
あ仙ハ十五	香とく十一十五
言のねえ十七	そのかゝら十六
梶葉乃十九	川おとけ 十八
野ハ音乃二十五	風流の 二十
篠のあ乃三十一	五人技 三十一
胡蝶や五	管根 三十二
夕乃や七	傘 三十三
芹鏡や九	早く咲 三十四
水鏡乃十一	其乃ハ 三十五
卯草や十三	折草乃 三十六

下巻目録

牛備 **五** しろくく **五**
若く **七** 秋 **七**
程 **八** 牛 **八**
十六 **八** 一 **一**
世 **四** 四 **四**
阿 **五** 五 **五**

右分仙

ぬ **七** 右 **七**
右 **十二**
旅 **一** 生 **一**
名 **三**
野 **二** 月 **二**
本 **五** 月 **五**
文 **六** 今 **六**
砂 **七** 砂 **七**

字 **九** 水 **九**
世 **一** 白 **一**
杖 **六**

右半分仙

志 **六** 松 **六**
幾 **三** 宝 **三**
以 **六** 海 **六**
互 **六** 海 **六**
小 **五** 芽 **五**
小 **六** 手 **六**
外 **六** 世 **六**
仙 **六** 六 **六**
時 **六**

右表斗

才三すくの部	三十
昭の部	三十六
附向斗の部	三十七

紫陽花や萩を小庭の別荘

とて

よき雨あひは 作ら茶袋

子珊

朝日は朝の子童の夢を

杉風

出づる露のお手掛お起

桃隣

かんと有内室をまわ

八葉

楳嶺うきうきと又茶袋

荻

何處ぞ何處とてぬき

几

さうとて鳴る漢風乃者

障

ちいさな鳥乃身寄る

京

高をゆくりと内の細

芭

山のふちろ下市乃里

瓦

る舟のほいさ揺れ

芭

四日乃月をすくぬ

障

秋来ても 畑の土は

葉

雨の音も袖乃身

芭

あつくと足の手も

芭

あつくと足の手も

芭

あつくと足の手も

芭

あつくと足の手も

芭

風 珊 芭 葉 障 瓦 芭 芭 京 障 几 珊 荻 八 葉 桃 隣 杉 風 子 珊

五月乃来り飛洛の人や
流るる流をこくたの事
是れ酒癖くく碎のわら
又うたをきかたゆら
川流し利上りてうま
ちんはと今約ハ鞠を
結構な者なけり切
見せしるるるるる
左分くくくくく
ちんはと今約ハ鞠を
葉栗の舞うるるる
國うたをきかたゆら
第一くくくくく
巽汲みけりい
今のりるるる
日用乃又器を
色後流は茶屋の花
小舟を思は

葉栗 風 葉栗 風 葉栗 風 葉栗 風 葉栗 風 葉栗 風

本けりけり
西日長軍よ
旅人の風か
さきを
月移る
細句
鞠通
名を
入は
中
以
而
物
月
秋
居
子
巡

西日 旅人 月移 細句 鞠通 名を 入は 中 以 而 物 月 秋 居 子 巡

何よりも蝶の現えおそひ有り
み出せし力の力さへ なる事
羅く目とをいさるし 此の如く
熱望つらんと言ふ位多し
手書より紀乃筆書く 顔より
酒くさけさあ あまらるらん
双六の目をのろくと言ふらん
假乃拵佛よむりよ念佛
中くよ 此の如く 此の如く
あそびを 里此の如く 此の如く
時をくくく 此の如く 此の如く
月夜くくく 此の如く 此の如く
花房あまらるま 此の如く 此の如く
唯四方より 草菴此の如く
一貫の跡むつと 此の如く 此の如く
駿をふの業を 飲ぬ分別
此の如く 此の如く 此の如く
此の如く 此の如く 此の如く

一 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五

丁二

梅のあまの月と日の出山河原
處くくく 雜子此の如く 此の如く
家普法と云ふの 此の如く 此の如く
上れあまらる 此の如く 此の如く
宵の内はくく 此の如く 此の如く
教誡と云ふは 此の如く 此の如く
以て 此の如く 此の如く
娘を此の如く 此の如く 此の如く
を此の如く 此の如く 此の如く
こくくく 此の如く 此の如く
願けしと 此の如く 此の如く
日くくく 此の如く 此の如く
此の如く 此の如く 此の如く
んんん 此の如く 此の如く
此の如く 此の如く 此の如く
此の如く 此の如く 此の如く
此の如く 此の如く 此の如く
此の如く 此の如く 此の如く

色夏

一 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五

丁三

去てを川流れに居る
 伊勢乃下宿に居る
 長持は小巻の仲間
 禪ちよ一日おそふ
 柳の角のそてぬ
 候おしの子は信を
 月待は傍茶虎の
 難の氣乃のあそ
 伴伴とくくる
 刺やうは古刀
 中あつたは星乃
 川まゝは
 そ月と大入り
 茶とをや
 赤くくの水

里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒 里 荒

孤屋

度豆乃の
 空の
 上法を
 ろう
 麻
 たり
 候乃
 い
 傳
 局
 衆
 蘇
 以
 智
 堂
 ぬ

豆 空 上 麻 たり 候 衆 蘇 以 智 堂 ぬ

素風は善法の流るゝといふた
 敷く村くぬありううわ
 喰ふぬ舞も 罍もさや
 何々の付と山伏を風
 無つと持て付るたささ
 巖こはたる糸月野る未
 お病やぬえまふ月未の町
 際の日や雪乃乃雪を
 唇こり手とさぬほの洞
 豆うく乃をとあつてお
 射付一矢翁あつる月の雪
 そらうくおとく壺の上霧
 虫籠つる四葉の南村河東町
 雪をとおく 表一園
 介れあつてを足付す橋の上
 大キと鐘乃乃くまゆ
 盛なるおとく殿并ふも
 勝つけつて一後始の下

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

妹まき早仇幸さる丸前
 敷居者くく戸とさる月
 早籠をまきする信二用は
 人走うよる 過乃有者解
 昭柳し海くく名も田舎旅
 糸行つておれは此の風
 春挽く舟のこけくを捨守人
 とは福流の舞したる福
 居乃不難飲付の夕月
 雷あられ娘かこゆき
 掛く壺合飛の雪乃雪
 肌をくくと情さる娘
 月けお酒を母活ぬささ
 日承りおとく一おの朝
 うくくと振板ぬよ花
 初ひ連つるさ乃入州
 橋度白砂川海も長園
 抱減採ゆは備さる

及肩 珍頑 之道 昌房 正秀 探志 房 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志

行申しつゝ物をあらふ又六日
 葦を休む喰をのり味
 母親の仕立くする嫁入相見
 色うきうきあつと那山伏
 江戸店を扱く生来の門擧
 麦と煮る身は明の乾片
 股引の足をとるまきうり
 宵の少るうきま竹生おの
 とんくと團の伊予藤原と月
 心を煮る秋のさよらる
 山廻の本徳文かうせの者
 石地乃 指をと降るさ坊
 怪剛き飛舟の太上味して
 かなしとあそぶ奈良の階上
 程の悲さあつと花を植度
 かしくと降る春の咲
 葉をを降ちりしとの雀人
 上は又驚ぬすむ白井陰

志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房

御明の清くお事や喜む
 月さううれゑのこ孫志
 猿の古風ハ葉を菊何れん
 も越帯乃のしらうりぬき
 度ぬの草履を人よ直きて
 又こううらゑの焼やう
 鶯房小頬露半をゆる金
 志をくあつと赤金乃の袴
 山傳ひ伊賀乃上野の糸袴
 相子の集結編うらうら
 お来合のおさうり秋糸
 小鳥飛り川 葦ま垣の上
 露月小倦れこちの介房志
 彩伝の餅のほましくとけ
 宿の草をくか若んこけ白
 手のふりかきくまあつと文
 喉舌の結まあつと表久
 傘干さるる月のさうら

探志

房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房 志 房

伊の丁かのり一紙おき
日さすよゆら足船の旅
見ゆ中ゆきるるる飯備
湖水と飲多し納まきつ
臣家ハお輝ある勢田の真
花のたつくのつくと松明
むさふきと大鼓鳴る月あそ
必女を惜しむ庭の乱菊
唐菓や勅の子葉をま仕毎
公平くくぬ怪とく解立
お細子男世帯の寺築好
たもろくことよ信芸事少
年振の園より西ハ徳也如
浄福即止くまけりまき
風まぢり所所何と吹き
ちふきやしも勝をかんけり
後うたそ白雲けり花のま
あつとんくくも軍威ふ

秀 考 紅 志 房 肩 紅 考 秀 考 紅 志 房 肩 紅 考 秀

色道

振賣の居おもれくまのしほ
降りたやまの時多きる新
書通う燈の小舟を引けり
行をま山より月とるる
好お乃儀を流さぬ秋の風
刺すれあふ玉乃露お
細の若をつきあまきり
里さくんえん二十八日
いさきいし軍のたゆみ
浪きれ雪は難候もせぬ
明志くしお就燈を吹消す
肩痛よたる湯屋乃膏茶
上玉の干系刻むるハのそ
らよあぬ日ハ内くあそ
約買のせつをうけ言つれ
堀より門より又十とる
け燈の鏡ももを招月を
砂より暖と乃くつる草

秀 考 紅 志 房 肩 紅 考 秀 考 紅 志 房 肩 紅 考 秀

彩畑乃舊もあらはく音の上
 鳴くも心なる 望はる月
 川城の葦一れあきあき
 平蛇乃ちるれくきき 散垣
 千物と日向のゆくまきき
 塩出と鴨乃 芭不とくく
 兼周と浮世とさるる京伝居
 又少治那一むほの産
 さくくことち悔目も四ツの種
 尊平れたのむ状のあと先
 中徳くく傍革命の信り
 望とあきあき 膝きぬ夕月
 風やこて秋の踏の三度さく
 親乃 唱子れ徳をいゆ
 ちほくさ茶の楊場のけり
 目黒方ありのつきのけら
 こくく 望花れ三月の中時分
 湯屋のちりを拂ふま風

牛 互 披 魚 全 牛 魚 板 牛 互 披 魚 全 牛 互 披 牛 互

佐圖

猿 糞より心なる 雲の松雲外
 日と雲と心と 群るる雲
 ありかき一他の中よりあき
 篠 井あり一飯米とく
 鶉ありあきとやうく 雲の月
 勇りの赤きよん世より秋
 白志きい一あきあき 膝の魚
 魚藤の二藤をとり一きき
 舞る事くみ川とさきよ 物候
 中玉りのの状乃 左太
 朝日の目とこさく 振音き
 一重羽織りきくおつぬる
 きらけりあき雲の比乃 柁相
 山とくく門とる有明乃 月
 初あり一留け人のうけより
 あり原とる候乃 小 籠
 足てる記と井と花の鳴り
 荷持ひくくまき 船 日

芭 魚 支 考 唯 然 支 考 芭 魚 支 考 唯 然 支 考 芭 魚 支 考 唯 然 支 考 芭 魚 支 考

東風うきの又二重あり其あり
 わらきよし 脚をたよりうき
 後呼の内儀ハ之を屋敷うき
 喧嘩乃てうきもむきときしゆぬ
 大七川か日と二日五音の積
 言うきか——仲のきりる
 あり種の家掛ハ皆おちり
 奥代世華と道年乃他
 酒もも青れやき月をり
 赤鷲江と 庭乃て一面
 定まりぬ娘のころは吉川め
 藤行乃てゆき之物との長
 多勢を侍るまとおき松の風
 大工きひの眞よりいゆり
 系橋巨きかひりきしゆり
 うききり市乃中を揮あり
 ぶあさり保生ハ花のりるき
 鴨乃油のききぬききき
 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

五月八日 辰 杉田自筆
 以てと立巻の形あり水流

流の形あり 枯家あり 宿とつれぬ店毎戸きり
 之味線さる家縁の食
 夕月夜有豆漬きり
 会きとてしゆ 秋寒ききり
 舌海雲あり 推つりし下駄のき
 大さきの紫れきき 加きり
 力なり 腕ほきり 字思ひ
 借ありかひりしゆ 物
 自佛きり六事あり 出きり
 異あり 泣ほめりかゆり 難難け
 物乃 借松武女のお坊あり
 伏見乃 借し 京のききり
 懐きりしゆ 入きり 友四織
 親仁くしゆ 坊あり 由り
 丹巻の青きり 仕込り とききり
 坊あり けりしゆ けりしゆ
 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

藤あいのとくくある春の風
 門の乃凡そとさるいと様
 時の乃一む雨の降通す
 菖蒲と琵琶と出す探丸
 鳥てふおのちをいささか
 雲のぬれ山とさう美り
 入りき松下ぬくの竹扉
 佛あおと林ハ情 正し
 馬紅の小神を襟のあつと
 ころの茶碗と土買と出さる
 ちろ浮れ二階と居るはとら
 月夜藤よ二瀬病をさく
 柳のむの一番花も 春鳥
 嶺よ都々袖の切形
 秋の夜年くくする藤切
 春か怪よき流るぬえり
 石三做又花咲山のげ三位
 田舎け谷りたの中も 雪

萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃

銭列

山店

新麦ハのきと出めぬそ逢外
 中々お故屋の度とらるく
 百時とらるく御愛敬の聲
 四五千石乃松のあつ山
 方く一醫者と門下者乃月
 踊の作法 待とおほそを
 をさるのけく方の善法
 ぼくうれ者よ菊とる
 藤生よまをとゆる 男方
 僅乃鳴おれかゆき南
 舟はくし像とるく啼く
 舟季の事乃と利上と人まぬ
 言よ生と土器賣と追らり
 只石中に月そささぬれ
 電乃ひつううく何侍とる
 志やうく止人さく煙あ
 奥の院おくくまを指のそ
 介ねくおとくくおのそ

萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃 萬 圃

其れ日よ春屋の何乃法...
 からしくや湯候く...
 目付...
 伊の本地...
 そ...
 羽...
 若...
 籍...
 日光...
 夕...
 花...
 夜...

店、店、道、店、道、店、道、店、道、店、道、店、道、店、道、店

史邦

推子ハ目... 冷... 鴨の...

叔... 稲... 價... 色...
 菓... 油... 價... 色...
 お市... 乃... 乃...
 本... 乃... 乃...
 二... 乃... 乃...
 石... 乃... 乃...
 手... 乃... 乃...
 秋... 乃... 乃...
 土... 乃... 乃...
 小... 乃... 乃...

店、店、道、店、道、店、道、店、道、店、道、店、道、店、道、店

史邦

竹橋の心もさる心前 宛
ふれ糞橋く役も常一
夕暮る洗滌僧を投はく
ととぬとつら一 燈の吊
腕うらま未れとおや 表傳
世あつてくさめ日ハ何ぞし
おぼひの空く床のうら
百里その海一舟の夜く
の刻一土佐橋本代斤之
富をそそむぬ中々生登
明く極路よ余なき月の書
ゆふよとゆくと時のかつ
抱膝に柱くまけく庵を卒
降子あさぬる宿野の舟
小南雲降雪のりりり
二夜三日の終るあつた
老翁と寺一燈をうの志 燈
百姓やませ首一らの降

邦 道 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

後の月見道庵

ととと

十三夜脱暑此を一先んぬ
小袖乃襦のこりな肩線 色
焼飯ふん乃箱漬口明言 色
荏烟麻のうに早雀つ、史邦
雨傘はくはぎ下菜の上め合 水
こみくき流生風呂乃のき 水
切髪をふれ髪よ赤んま 涼葉
来子紙灯りく 桑橋の冨 道
松板ををけく掛ら寺の門 良
心と中子やをたけそのこり 子
富乃身をとかくさぬをどく 子
なごころく一画し椽前く 道
看月夜麻乃夜の影法師 邦
おの侍者く一 薪割ら秋 邦
未廣を釘よをたら 柿宣の風 子
茶中くく 斤巻の巻つて 子
先けと筆とそ一むら初およ 道
くふはと呼吸く懐よる止る 邦

邦 道 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

麻屋も花をうとく一帯切
中徳くちなむはりのさえ
と足毛子履を履場のあて
新しは 仙をぬきあての好
書をやる原流の牡丹をて極
毎はさき川くちをさき子
是ハむくみて何れか
まはるる衣子端家のおきほ色
伯母のちのけり砂人の氣
きの月言性け梨の穂けけ
枝もく 菊乃うきくちのさ
赤毛およおそけり世のう
今望ほそ名をあら奇屋
初老ハ世ハのわよ安う中よ
信一 疾風を海を夕暮
あ子又花を法里一 弓室穂
あうぬく乃乃のあま

邦 紫 代 赤 子 系 良 子 道 良 邦 乃 風 邦 景 志 乃

路通

お仙ハ尼の言を妻よゆり危
寔れ強固く一 飛く 翠旦 李宮
我猫よの梅通不啼のひく 芭蕉
ほー けり乃乃 宿法の月 龜仙
權小つぬ糸尻のつみあひ 泉川
仁と 仙乃乃 白雲 執業
舞入子系書子巴くちを好く
あう 古風乃乃 奥前
免了しき言出せくさ西流ん
程も強うくくそ川端の子
川里子揚つるる布とく
併そやう 蚕乃乃月乃乃
けりくく 系衣梅のあの方
一む凡あう家 居れの家
おや けり屋をさき 物中
乱れ 後を却りぬき号
花徳や 言下は花を志の奥
言乃 始をさきくちを乃

通 川 道 通 仙 道 皆 執 業 泉 川 龜 仙 芭 蕉 李 宮

世を乃くを浮世よりして
彼岸より心と種ゆゆえ
ゆきち子や子に似る存し
いとぬ母のいのちの知れぬ
元結のほつとくちるるる
人乃か心を横より栄々
河つて藤原秋の葉一さ
陀籠さくた本曾乃縁の書
月の霜亭をらつて持あよ
朽ちる舟のりこ他より
唐人の志乃ぬ初よりた
古くく俗より身よりへる
何より一もは目とぬめ
障乃あを持よりほむる
ぬ木の光年のよなるる
赤きくくを持より柳
美さかり舞者をと取見
くくをす持より中より

道 仙 皆 通 川 仙 通 皆 通 仙 通 皆 通 仙 通 皆 通

言とに月よりあわむ位

位

言とに月よりあわむ位
きくくを一浦の位やま
まゆくの葉のふと手
てくくを層のふむく
のくくを梅のつむく
瓢箪をよよ乃あま
一里ハその何より
尺よりてらん杉の乃
かきよるまを夜の
くくを母のあま
宿よりては月より
ちよりもらゆる位
放りて福より心半の
つらへよさる縁の
西川の位と縁より
きくくを母の
あまを朽木の
きくくを母の

道 仙 皆 通 川 仙 通 皆 通 仙 通 皆 通 仙 通 皆 通

作賣の鹿をいつら夫娘の里
空と多文とて、乃ちらに
後の世に罪と名有りし毒を
九指ハ肩、くまの石の埃
下ふの松、くくを吹ありし
むくう斗、と砂土ゆめ月
秋多し、哀をくまのうら
瘦し、肉乳を志、辱をきこ
ととの世に猶、くくを故の肉
極、小書も情、くくを、あ
その情も、刺、くくを、悴たの心
生本、燃、くく、あ、くく、の目
斤く、ハ、細、く、く、あ、く、く、の
悴、く、く、人、は、え、く、く、く、く、
背、く、く、く、く、く、く、く、く、
峯、く、く、く、く、く、く、く、く、
優、優、優、く、く、く、く、く、
鹿、乃、相、あ、く、く、く、山、く、

系 竹 云 木 竹 糸 糸 竹 糸 糸 糸 糸 糸

言の松、ハ、竹、百、の、後、よ、あ、く、く、
花、空、を、と、と、く、く、の、く、
う、く、海、を、ゆ、め、乃、の、食、て
青、帝、あ、く、く、く、立、れ、官、
あ、く、く、く、乃、乃、き、ゆ、く、月、
火、を、あ、く、く、く、の、そ、く、秋、
て、く、く、く、く、く、く、く、
朝、日、よ、む、く、く、く、く、
生、乃、つ、き、乃、あ、く、く、の、間、く、
就、よ、く、く、く、く、く、
世、の、く、く、く、く、く、
夢、乃、の、あ、く、く、く、く、
富、士、乃、あ、く、く、く、く、
母、乃、乃、傳、を、か、く、く、
産、物、く、く、白、装、の、舞、を、く、
酒、を、く、く、く、く、く、
よ、く、く、く、く、く、く、
や、く、く、く、く、く、く、

河 通 宗 坂 文 旦 糸 籠 他 水 夕 良 糸 良 皮 又 糸 水 糸 糸 又

つきよけは居居となくて目録し
 良乃ほろろをくやむ乙の子
 龍をむむし〜くを後の也
 様ハ亦末乃松をき〜う月
 苔を〜一仏の徳を松〜
 夢とあまひ〜くをぬをゆめ
 あり神より〜おま〜月の教
 奥〜〜ぬを母を葉の一株
 赤海はま〜云乃後の産を咽〜
 力を夢代と〜子の孫〜
 位白を〜う〜を〜の志まわ
 赤良よ〜と〜ちぬぬ師をん
 酒は良を〜使ハ〜人〜ま〜
 産〜と〜まぬぬ産乃砂嘴
 〜と〜ある山堂の船射の〜
 城〜と〜し〜れ〜く〜か〜ち〜後〜
 法交地は胃を〜抱ちをの陰
 去〜く〜く〜け〜考〜れ〜一〜時

善 良 翁 云 道 家 良 兼 天 為 兼 道 善 良 不 為 道

燭並の〜也 秘秘乃目敷れ
 蓄れ〜〜ぬ〜か〜ひ〜の〜
 小灯を〜〜ぬ〜を〜を〜
 神〜〜〜見〜る〜真の〜
 一通み〜せ〜は〜墨〜る〜船〜月〜
 善〜〜〜と〜〜と〜れ〜う〜打〜
 歩の〜〜〜歩〜ぬ〜念〜思〜
 手あきひ〜よ〜出〜る〜あ〜
 物予の〜の〜ゆ〜う〜
 中〜〜〜
 活〜う〜か〜ハ〜寸〜甲〜乙〜
 石仏の〜つ〜き〜あ〜ぬ〜
 牛代骨〜〜し〜牛〜川〜
 石の〜〜〜
 室乃ハ〜〜
 みられ〜〜
 唾〜〜〜

善 善 通 兼 邦 善 翁 道 善 邦 善 翁 道 善 邦 善 翁 道

錦衣をひたすにけりしるもの
あふ力よ志むる義り
おしと多きと云ふる
疾し〜く〜のや長はら
斤定は〜はひはつれ古も
明日つ〜らやと書よ啼く
竹あ〜庫〜と響の響り
富乃の内よ〜川を
高井は〜はるは夕月
おの聲の〜ぬあ〜
やけ〜ちやうりかすを
以兼乃の印西〜華さ
何さ〜く〜く〜
き〜の中よ木らとや
け帳を斤側〜る
會芭ひ〜く昔さの上
仙よハ形見の志と
茶をつい〜乃とら

邦 道 翁 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通

徳若堂序

文仲

きよ〜記はきよ乃乃
材は〜とけよとけよ
月〜程の響と
破き〜
可〜
菰斗〜
湯の〜
常笛〜
虫の〜
あ〜
あ〜

邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通 邦 兼 通

水乃方有遊覽子のころ雪
松口のまうに白うなる年
酒入の小キ破着きぬさく
物乃陰よりおろそり音
嬌——きい——さをもる左指
いさかきらるる癖もあつた
門きり——桐の松の手をよま
蓋も枝も雪よるにた
くけ合よやて通る時あき
田舎よあつた中立乃門
中の月をこ——名男のあつた
空乃松の名あつたなり
垣り上湯屋のあつた
少量のむつきけ干場あつた
傘たもまも老のせやれ
経一口もま——ぬ舟の目
衣をを掃あつたをゆり
何くつろきくたなりゆき

考 文 邦 来 考 文 邦 来
考 文 邦 来 考 文 邦 来

味増上玄

涼紫

雪ハ雪ニ河縁の遊とあるまは
すく雪乃乃唱さしぬ雪
門書の藤白雪月とて
すさむさ神家お裁の持
秋風と雪とあつた裏山
史も雨取ハ目さるるなり
剛空く唐の——とに
冬年よ上雪を付く悔め
尼ち乃老尼ハ独髪刺
冬もハ薄のうり社あり
掛後屋小神の敷とて
金乃雪と園乃雪くは
見らるる伊氏一羽の思い
行くくさ世れやをふ信
おあおも伊氏の料理兼て
禪定くあつた心屋の砂
新月の雪の雪物と川さ
日影の雪乃雪片めは

千川 宗波 山崎 酒子 川 紫 子 苑 川 紫 川 紫 川 紫 川 紫

石を多き岳のたぐはき處
 地れ乃の掃ふる西の若苗字
 爰をいそぐ麻の音を志す
 古れい久の四五六の秋
 中の月極小はつれと破
 見よる筆をうきり
 先を能く出依ぬの一繩子
 着くはつれ内は帷子乃
 ころきくをきり
 表を七をきり
 三條乃をきり
 茶や乃三階は酒乃掃
 突くはつれ
 恨乃をきり
 茶を又又きり
 百荷うをきり
 徳をきり
 きり

意龍會

添葉

風流のまことと
 流乃のまことと
 砂門のまことと
 門ちうまことと
 月の影のまことと
 志らふ西のまことと
 庫裏のまことと
 ぬらみじのまことと
 三つめのまことと
 今もあるまことと
 川を流すまことと
 小船のまことと
 山を流すまことと
 志らふまことと

入角と四蝶の仙きく行いさ
 虎をさきけを食をそそ
 長うぬ舞人帯此賣所
 又りくくくくくくくく
 火桶止る鹿ぬおのる清州
 蒼まこれ粉ふくく月日振
 西のゆきぬ手押し搦く持
 木ゆい^上の面を^下のふりし
 先自和より秋乃申の所
 榜石のぬまより中後の月
 箱州つまうく小舟ふく
 物の尾房さけく雄の童
 雄氷乃きよあ^一流
 ぬ海をらわ中を屋ま
 搦壁あ^一くは^一中^一く
 や^一や^一く^一高^一く^一送^一る^一云^一の^一音^一
 葉を^一喰^一る^一の^一ふ^一け^一る

紫 山 子 葉 紫 葉 山 葉 山 紫 葉 紫 子 紫 山 紫

據はれ目光の時代東朝まをふ
 虎徒を園田云の事よ行 為

條乃あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 牡丹の志と^一洋^一を^一廣^一場^一
 短歌も月^一の^一い^一く^一ぬ^一形^一
 破ち^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 雲より^一い^一事^一の^一む^一る^一此^一老^一童^一
 出に^一や^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 吹倒^一は^一松^一を^一吹^一た^一け^一る^一
 い^一ら^一し^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 大の子れ^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 箱^一を^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 赤の^一ひ^一き^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 生^一る^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 着^一る^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 巡^一行^一の^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 見^一る^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 志^一ん^一と^一か^一ら^一る^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一
 担^一つ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一あ^一く^一

紫 山 子 葉 紫 葉 山 葉 山 紫 葉 紫 子 紫 山 紫

春階踏穿の雪をさびり
まらるくくろ 行亦乃始
陽上りの落衣子も君を待たず
空乃や子まよへり 水月
淋しきまよひの心なきを
夢乃の難き 何曾の山 蒼糸
秋鳥の遠く 貴乃筆子別れ
ほろ乃乃門をさくく月の夜
人足の中 同毛のあまの泣く 大舟
玉をささげゆく 玉をささぐ
まよひと日におひ 死取
降か雨もさくく 蝶乃の香
月乃の影に矢並を流く
空乃のやま 一門の金物
院乃より 流川の 内手流の夢
まよひとまよひく やまの夢
まよひの川より 寒きまよひの陰
城乃せいのみ 申の 苗代
糸 菊 川 宗 舟 柳 菊 糸

野
波

中人挨拶うてあまの柳
日よりくま 雲亦乃さる
猿乃の月を乃山 報く
まよひとまよひく 雛子の誓ひ
暖かまよひとまよひぬ 女の言
極利白のく 砂を君乃ゆ
丸もとまよひく 流く 藤乃
境の公事乃の 入る 持たぬ
まよひとまよひく 拍も 鳥の翼
うき世乃の 命を 終く 藤乃
瘦れよ 葉を 一白 搦たす
やふ入るまよひとまよひく
鶯乃と 類うまよひとまよひく
お打かたけ 扇乃 月影
口くまよひとまよひく 酒を 試み
色ひ 佛く 朝乃 夕乃 火
咲きよ 十符の 夢 葉 あり 春
まよひとまよひく 摘たす 春乃

下
吉

糸 菊 川 宗 舟 柳 菊 糸

けつくと使すぬらふもの
 醜のりよ夕日ちりけく
 けは徳れせよと子供を儲け
 焼味喰ひて吹きさしけ
 一抱り儲け事しそけけ
 うちも粉雪のりよとけ
 おろとを言ひ中居しけ
 むの業擡ふと苦のやむ
 市原りそとを言ひけ
 秋おとそとを言ひ
 月影よ小澤仲子のよ
 苦麦丹を言ひ
 ちりくと相の茶屋を水神
 身付とある登の給古日
 やしとを言ひ
 猫可きとを言ひ
 おのきれちりぬすめある
 第目のとを言ひ

葭、皮、為、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭

朝魚や赤いゆきり
 おのきくとと刺さきむ
 葭前まはぬ月いぬきり
 葭下りまはぬ月いぬきり
 はやりと通はぬ月いぬきり
 葭丸をきり川上より山
 こらりと秋のおりまはる葭
 ちりくとけりてまはる葭
 雨さりと白くまはる葭
 祖父のぬきやの葭
 子供皆を言ひ
 後ろをかくる葭
 さいくとを言ひ
 因世とを言ひ
 後夜宿る葭
 さいくとを言ひ
 史の生もぬ

史邦

葭、皮、為、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭、葭

下をほ生千白れ解陽
 あきつき陰あくの身さよ
 堂より雨れ體通し
 ころはくは皆堂の影
 其の思ふごとく
 布衣破き以乃れ紙の風
 松より月松崎乃月
 ふつとてあ乃五
 妻戸下く
 泣くして志や
 あつたあひが
 世の中代業を賣社
 孫衣尾法の風
 富士画
 縁子
 夕
 人

馬有

夕馬や其又場とる夜
 西日とさく枝乃下州
 馬のまふういみ
 一やれ跡く酒
 得よ穂夢より
 松茸も小侍
 ほくゆる牛毛
 長石のほ
 孫乃跡
 物ひ
 今の
 のふく
 糸け
 月影
 雪乃
 おの
 土申

功をよ申合はるの存れある
伊勢乃影又料理先ん川
榻代をささぐ次と風の雪海を
尻もむさハゆ力虚云れわさ
暖火とをた後と暖る青の月
多里くくはあさわ種の中
如行 好も子園が裏まゝくぬ
合兵乃ゆ々男雲れわく其
服乃とわや法れらさ為白
本も抱付くのそく岩屋
作山まなりあさくあ相勢
日やさる島と上田のお
夏の間も明方次る毎の
流のあまこく^い諸^まま^り
深泉いみのゆりま^りは
八月ま^り終る櫻散
むり^り花は日^り思^り雨^り降^り
あ^りハ勢^りを^りま^りま^りる^り雪

、 飯 行 始 星 川 星 始 川 行 始 星 川 星 始 川 行

雨中

傘小押か足さるやぬま系

あそま^りま^り心^り嫌^りの^り繁^りは^り一^り 湯子
梅月^りま^り冷^り越^りま^りま^りま^りま^り 湯子
火の色^りの^りま^り挽^りり^りま^りや^り 湯子
洗濯^りを^りま^りま^りま^りゆ^りま^りの^りま^りま^り 湯子
はめ^りる^りま^り又^りあ^りと^り吸^り物^り 湯子
浦^りの^り入^りる^り部^りり^りま^りの^りま^り 湯子
黒^り透^り乃^り松^りの^り押^りか^りま^り 湯子
く^りい^りま^り一^り度^りの^りま^りま^りま^りま^り 湯子
ま^りま^りま^りま^りま^りま^りま^りま^り 湯子
伊勢^りの^りつ^りま^り又^りま^りま^りま^りま^り 湯子
お^りこ^り一^りま^りま^り乃^りま^りの^りま^り 湯子
金^り辨^り乃^りま^りま^りま^りま^り 湯子
の^りま^り日^り和^り乃^り浦^りの^り初^り居^り 湯子
秋^りも^りま^りま^りま^りま^りま^り 湯子
鼻^りま^りま^り子^り乃^りま^りま^り 湯子
ま^りま^りま^りま^りま^りま^り 湯子
瓢^りの^りま^りま^りま^りま^り 湯子

子 牛 飯 意 良 紫 飯 飯 午 子 飯 子 飯 子 飯 子 飯 子 飯

春の宵十乃多き代時〜
 御平よあ〜情む様を日
 智阜のい〜ハ海と〜も
 先手そ海ゆ〜宿の〜つ
 むつ〜交遊〜と〜
 丸くら〜は〜結乃情お
 祝云〜母〜く〜究め〜
 本〜つ〜娘〜父〜多〜川〜も〜安〜の〜里
 足場〜も〜き〜月〜の〜細〜乃〜一〜編〜
 庶直〜よ〜多〜の〜ゆ〜め〜き〜書〜
 念仏〜も〜ゆ〜サ〜キ〜証〜ハ〜跡〜情〜あ〜く〜
 四〜五〜十〜日〜は〜病〜あ〜く〜う〜
 救済〜を〜妻〜も〜延〜く〜る〜雲〜
 荷〜め〜い〜この〜と〜口〜ハ〜塩〜賣〜
 男子〜を〜遊〜ひ〜は〜事〜と〜多〜の〜
 席〜へ〜も〜よ〜〜の〜家〜
 切〜う〜も〜も〜本〜の〜さ〜や〜
 う〜多〜あ〜の〜あ〜る〜の〜細〜滝〜

坂 牛 草 坂 牛 坂 水 坂 牛 良 子 牛 坂 紫 坂 牛 良 子 良

酒番月

芹焼やほ〜この田井代物お
 峯〜と〜き〜〜卵〜心〜鶏〜
 織おら〜と〜情〜を〜遊〜よ〜る〜と〜て〜
 折〜く〜〜と〜心〜裏〜は〜情〜の〜
 為月取干綱情乃胆〜
 吹〜く〜心〜牛〜を〜と〜ぬ〜
 家〜を〜お〜入〜心〜村〜子〜情〜を〜あ〜き〜
 板〜の〜は〜糸〜〜跡〜は〜運〜
 あ〜さ〜り〜お〜の〜堀〜情〜の〜娘〜
 坊〜ハ〜云〜ら〜き〜も〜あ〜〜虫〜不〜
 日盛ハ跡よの向持〜
 和回秩父花〜
 柳乞の春〜ハ〜初〜を〜
 与〜情〜〜
 虫〜を〜と〜〜と〜
 相〜と〜と〜と〜と〜
 福ハ行命〜
 破〜着〜ハ〜さ〜も〜ぬ〜

紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子 紫 子

雲ふハ春ヤムも紫好く
 日記はまゝ——一帖の紙
 猿瘡やまふ月のみ白
 名はゆとりまゝく安藤の産時
 者伝ハ兄新しぬ白母とるやん
 え糸とるも 酒乃勇方殿
 焼うてく産子纏はるるの月
 巻草束うくと 帆寄さ内
 家聲ハ飯後太史とまはけは
 長より名を度の有くまはせ
 能時とり産くも産く産く
 紫よ糸とまゝ存不は床の斤隅
 杜宇はいやと故やと物ゆけて
 湖のまをまゝくむ淡田の物や
 為言乃上よ妻のころくと
 係乃妻ととくく産るもの
 おぢよ子依のまゝる袋町
 への松栢も 乙柿のま

子 糸 氣 子 紫 意 子 紫 氣 子 紫 意 子 紫 意 子 紫 意

左研會 たまご

早く咲け九日と道下者糸
 云うき多川青月の家 花柳
 彩鳥ままの勢の啼もく 路通
 ましくまゝくと山乃まゝる 文鳥
 酒香のふせり 障子とぬる 歌人
 なほおのりくも 文を和ると 如行
 足の裏かきく 脚をとまめさる 荊口
 かし——涙問きく 傘をまぬ 山筋
 二人の代書よるや 音ぬし人 木岡
 夕陽を纏り 粧をまゝる 油音
 兎角くも 産はる産はるの心く 草長
 手物乃うら代書まゝく けし 料紙
 飽果——穠を以て白意く 柳
 産ぬまやなれを 目も 産はる
 月窓くは中あやうて 加吉之
 暁ははれ 軒乃 糸別
 一樽よあはるも 山の花まゝく
 産はるいこむ春の芳らみそ

人 色 口 舌 意 柳 糸 意 名 口 舌 意 柳 糸 意 名 口 舌 意

萬葉のなむいふ年いふありく
村を川もさかしくなる道
所まきく御師の成れあや
二代上子の醫かたりけり
柳うれまひほつゝつゝま
烏帽子かたりぬ髪を飾る
冬こまり物さるこの大さふ
春のめくくやうく子葉のなる
夏しくあまればあふまよ
危子たるとさ月のさめく
月影まよひとやうと又透して
蔭うとあふ一うぬの蔭
何事もなきとけりぞ隙ぬ
道子とほれよさをあま
丸腰もたれく中しく着け
その訳一へる舟のさか
花乃陰うぬくこのい後枕
梅山吹りし跡もつるうと

河 成 香 良 川 杯 人 通 京 口 前 良 為 因 切 成

水話 晴し人の心をも依る泊

土田氏の草子

さな後

昔乃をりともあつたあま
初風よ向か谷朝をひらき
道子の心にもあまな
さなはさよ暖簾さう合月の結
解く後る横もの影
軒外のものともあつたあま
豆膏味のなほ伝流海をこ
尻あぬの結うらさ中もあま
雨代後見をまかりけり
地蔵乃もらよさむ蟻の豆
蘭と刈あまもつてあつた
切まもあつたあつたあつた
川縁乃もらあまさる月
うらまもあつたあつたあつた
袖うらまもあつたあつた
あまは二腰もあつたあつた
あひうらまもあつたあつた

川 成 後 川 成 後 川 成 後 川 成 後 川 成 後 川 成 後 川 成 後 川 成 後 川 成 後

小童の舞の舞場を足さるゝ
 舟の自由は 本日よ ゆく 九月
 月夜をくわ毎まききの際 巳文
 切もき射の尻と後こむ 川
 三福の云伝うくも秋の風
 紋をうきくく川うきすむ
 赤意をききき草るもみ
 道鏡の夜代 殊くもくも麻
 袖をく下戸のくこの極はきき
 草るもり雲のききあきき
 金剛の一世の時のもみ盛
 流るもきき此乃照りきき
 たるの那きききききききき
 之傷つききくも代終き
 そりくも男きききききき
 ききききききききききき
 有明の百屋きききききき
 五くもきき極乃す川其
 文 功 考 能 川 次 考 鏡 川 文 次 考 鏡 川

具のけし極乃きききき
 土屋のく極乃きききき
 物ききききききききき
 きききききききききき
 洗滌のくきききききき
 望老のくきききききき
 痛下きききききききき
 何くきききききききき
 けききききききききき
 散りきききききききき
 水屋の目きききききき
 ま古乃の浦ききききき
 花ききききききききき
 顔やきききききききき
 物乃の極きききききき
 きききききききききき
 貴ききききききききき
 二月乃の雛のきききき
 先

たまは

ありしりきまの巾のけり
 小細き縮もその中
 黒袴乃侍よ鳥の鳴連く
 雨さるしり西乃侍く
 竜伝の側よあきく目と雲
 松葉乃培れきる 裾ふく
 稚子笛と首をさる 袴の伏
 雲霞さしきくつ 鳴庵
 けしとせぬ淫聲のききて
 際もきくつと 傳ふひく
 やはるふきくつ 衣の目
 次乃侍く下子てとて
 あれ家にあの彩酒をきく
 多侍ちひく 門乃侍培
 千物の蓮くゆり 一く
 敷乃志くんく 思き小牌
 号女よ獅子の片くを擲き
 印くをさるんく 肥くあ松

丁 後 丸 記 兼 備 有 後 丸 之 先 車 乃

芭蕉

初草やせし自ぬゆめ秋の寄
 去きすし記よ湯を谷川
 峰かまう居村の勢地定うて
 山くこむ月よ草薙の蒼
 塩つきく候く少籠のる事く
 持くとはさる 草代川を
 手身ハ土持許ま又百巻
 辰訪乃所所よはく言代管
 舟當代草とやあく石の上
 登けしきくつ 吟る 持子
 四つ折れ蒲葉よきく丸く
 物出くつし 吟く 吟る
 月さくつ西の陰やむ早鳴り
 子稻乃侍く保めく刈大豆
 狗むしよ又記さくあふの所
 番りし赤子をゆをるお切を
 志きのをめと思えさる 志子の
 細文井 備子のほるこの結

水 史 生 流 意 邦 前 兼 井 兼 邦 兼 兼

三

秀乃よた穀はた。松芝居
 の口なすま。伊丹詔白
 珠城子望。良其代表か
 是能妙際。いけん物役
 已まき。まき。おまのま
 娘。入る。まき。おまのま
 袖め。まき。深権子。代表か
 月を。俺。まき。おまのま
 柳。赤き。まき。おまのま
 公事。まき。おまのま
 傘。まき。おまのま
 見る。月。まき。おまのま
 出。まき。おまのま
 千。知。まき。おまのま
 手。機。まき。おまのま
 鼓。まき。おまのま
 人。まき。おまのま
 房。まき。おまのま

菜 葱 葱 葱 葱 葱 葱 葱 葱 葱

元禄五年

十二月廿日即興

まき成

お家く。まき。おまのま
 隙。まき。おまのま
 目。まき。おまのま
 羽。まき。おまのま
 夕。まき。おまのま
 出。まき。おまのま
 あ。まき。おまのま
 肩。まき。おまのま
 足。まき。おまのま
 下。まき。おまのま
 つ。まき。おまのま
 む。まき。おまのま
 硯。まき。おまのま
 板。まき。おまのま
 三。まき。おまのま
 ま。まき。おまのま
 葉。まき。おまのま

普子 黄山 柳障 银杏 普 普 普 普 普 普 普 普 普

足ぬり 希尚も 友と 秋の電
高くとり ぬと 揚も 翁戸 楳
山 鳥代 つらき 心 志川 なく
好く うらみ 合歡の下 雲
名 ぬ白 様 下 底の 心 志
思ひぬ あふ 屋乃 心 志
音 志平 青 洞 家 の 雲 うら
集 志と 志と うら 心 志 志
見の 振の 志 志 志 志 志
志 うら 志 志 志 志 志
路 志 志 志 志 志 志 志
後 志 志 志 志 志 志 志
松 茸 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志
老 志 志 志 志 志 志 志
志 の 志 志 志 志 志 志 志
対 志 志 志 志 志 志 志
こ 志 の 志 志 志 志 志 志 志

李 山 志 山 鄰 堂 音 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

元禄七年三月下旬洛参参時 汎竹

牛流止 村の 志 志 志 志 志
喜 志 志 志 志 志 志 志
一枚 乃 志 志 志 志 志
柄 志 志 志 志 志 志 志
月 形 志 志 志 志 志 志 志
境 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
秋 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

石塔と云ふては起るるを
宵更に仲より侍るるの
小工面を仲同くするは
まじりて言ひかたを
縁せよとてそをく宛う
別はつ所れもくはく
明月の餅とてふは東よ橋
あそびにわづらわらむら
道にまゝのけりや津杖の雨
毎はくしごと詩をとより
女房と只笑れぬ是れ
尻をれ武士乃てまてく
土を箱の空井ハ杖と切る
田の草時とてやる不二
坂の石すゝまそめく
ほくはく名とて行く
病めそ結白まゆる
やうへへ白とやいろん

元禄七年六月廿一日
大津市前番より 百蔵子

萩乃芳あはれありさの
つふい鶴のあつた松
まはる川一田面を帯
直乃をあつためん月
腕揮活きあはれも子
若殿の簾れ中のちのひ
花灯とほせとくひり
仲衣羽織をすくひり
浦くそをゆくくく
古き名保の巻とく
有明の何とてつ値を
まつてのりてさる山
手形いの衣を折る
瓶子よ産くくあはれ
杖突く登りあはれ
虎あはれくまの急

式之
芭蕉
夢斗
村靴
梅市
梅額
豆
斗
之
市
市
之
額
百

春乃まきく様よ小舟と翁をく
翠簾此屏風を画く獅子
面影よ打たつたる座園
宿鳥乃枝鳥の鳴き声
けつくと翁乃若此の如く
祥の雀の敷くつと 在く
紫雲の市代梅の酒買
明日此種梅の月も晴
稀まよふ漕なよ小舟
家よ信さよやまのの故
子依るの傳ふあまの
千は此座よりみゆる株
物あよ下知の老侍を
暮を志はきい居るを
話乃まよふ香の
畑あまよふを
くまの村場ありと
院より信ある 萱 一房

村 白 市 之 道 穀 之 道 西 村 之 市 村 之 斗 道 類 村

元禄七年四月廿一日

女前考

女前考

秋ちき知の言や 四
志とらりふけり 梅子の
月あまよふの火新
起りし海より
傳ふる丸雪みよの
夕食をくく隣の
何の信を志ぬ 大き
宿くく世の
うらぐ香の
仏檀の
標くく
八羽の
あまの結の
西員陸ハ地
折言よする
後那く細
足袋服く

考 節 然 考 煎 節 考 必 節 道 院 考 道 節 支 考 性 考 本 節

下巻

年降りあはれきや月一休をて
傳はるるをいとるのしづ
ゆはりの上より白く顔はな
るるを 吾輩とて月をいとる
半部とて口を雨をよるるを
舟の根をゆくめはなゆゆく
たゆゆくとあ人の枇杷とて(連
ぬとむむむむむむむむむ
空の空をむむむむむむむ
重りむむむむむむむむむ
髪強くくあはれむむむむ
本より十とらへんをあむむ
ははは中縮はまむむむむ
桶もあむむむむむむむ
投すむむむむむむむむむ
そむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむ
はくく乃肥る 赤出れ岸

然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考

伊勢六甲春興

なまぬ

種草や花のほろを賣出れ
片煙ふまけをゆかりなり
酒好のゆも酔をなむむむ 土芳
ぬまくくくき草花にるむ 良呂
有的の七ツ起なり 茶院一
ひまにこれと付添へる
秋風は桂の戸にらる藤入る
小俺のくもよにあらくむむ
むむむくと夫家の川を歩後
あまのむもむむむむむ
手捲の男もむむむ三三編組
人よれ流くくき名に流一
萱草のなもかりぬむむむ
秋く月輝乃啼死むむ
月をくく不屋根お言風の音
こぼれてるるを 藍瓶乃あ
世帯の志の身はよむむむむ
板此つるる水のかまろ光

然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考 然 考

猫の月代六つ樽様は四つ赤く
 聖日れはひの鐵籠葡萄切
 加の白く宿人全水ハサウのこ
 多し叫く出る髪ゆひ
 やうくは緋屋の形をたぬ
 冬玉の宵空あはまひゆれ
 けさ丸くもくもくうらむを
 ちん元板のあまなうらり
 初夕まきひのあまほ過
 ひと気なる御り字の尻
 田圃れ縮たまあは月はく
 月ひえおむむ牛の子れ猿
 家くく丸紙のさきあつ神も
 志なき人れ何は成一
 祐風やゆりおまはくかえぬ
 筆をおくもく鳥鳴あす
 志くくと一重れはまむむひ
 長宗なき是れを敵あす

不 芳 跡 道 若 不 道 跡 不 芳 跡 不 芳 跡 不 芳 跡 不 芳 跡

牛部屋は奴の夢より秋の風
 下櫃の上り蒲菊柳は流
 酒志保る常あうは月まう
 あふ茶四の奉まなうう
 美作は是をさう方 確も茶
 蓮れ其ま家の氣かあは
 後持もまにあはく海運
 桂舟の雲と洋むさうこ
 休も自由権あひの魚よりく
 溝級うはれ瑞ひあを筆
 生能なる葉お強をまうら
 以つもあひ月秋の下枝
 秋の月く又一きり茶子汁
 為縁あはく伊はる月
 分別れあをさるる筆の尻
 病るはるる浮世さうさう
 夜何なきはらぬあはの夜
 ちんけさ丸くもくもくうらむ

七を級

史 邦 大 妙 玄 未 筆 正 秀 益 益 邦 妙 希 希 益 益 邦 妙

人心常陸乃心ハ多ク之類
 春月すても疑きおちかけ
 うさるをてけ并は後す様も
 絢買家の序らきぬく
 硝子に減除を申す茶酒
 橋のつむり——
 州むら麻所イニカのつゆ
 明るの障の太敷おちと
 大くいおれ——
 カクし似をぬ磔くひを茶
 けらさぬく甘の中の善既丸
 菘くくきぬ忍海乃月
 白ひの志くくくらし袖前
 子も靴乃子蕭おひを
 油物やぬ電工瘦くく
 常の危く麻しとちゆく
 やりまハ風の多をけてそ次
 靴
 糸
 本
 州
 邦
 堂
 道
 秀
 事
 本
 州
 邦
 善
 道
 秀
 事
 本

いせふひはとう分園のそめぬ
 橋舟乃垢をりゆらけひ船
 近る子鶴江島を踏舟を
 加へのそらひ——
 尺返をを屋根乃目乃照村時
 妻業者乃香此回今ぬふ
 家法父のなき女房の白き
 ねはくくぬく山外の髪
 若皇子乃ちのて草鞋奉り
 けく——
 鶴入常々赤き既のきりて
 とまの曲梅をき結も障
 板乃板ま——
 婿待くもふ後の屋お入
 袂イニカゆらぬをきけく
 ねく帯くや妻の宮のく
 都より十日を逢ふおさく
 肌をぬくくく
 依
 子
 道
 糸
 本
 州
 邦
 堂
 道
 秀
 事
 本
 州
 邦
 善
 道
 秀
 事
 本

手紙を沖師の下へ祠へ
名保一いかに元も加へ
持はぬぬおた力をちも累
よふえは解るる馬の振髪
夏川よよ青の微を踏ちう人
乃祖乃乃今一乃月を尺屋
赤恋ハよ赤の芽を積を
眉作ら髪よよかーあかみ
大系乃乃細巻黒なる一
板多く板赤く牛も蓄きし
冬此みまよこの一乃を物
初時多六七の松をつい
走ら草鞋乃乃川ぬけや
物すきをあ影の影生麻元
筆あし乃乃猪乃乃みり
書るる六世やふ赤(き)おの山
春風吹し乃乃若れ細布

子 系 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道

元禄四年

とらこ

女くととて心さよふ月の香
舟をるるくく並れをを赤
しめきて雪も梅のぬすけはま
獨こそけうろきれせり一
まらくくし候ハあるやれ碎
峰ふ山と中あさ乃乃陰
赤恋よ手割を袖乃乃赤き
石れ赤指の出分をよむ
勝重の夢を忍うけて懸ひり
念作ら一乃乃時多う
移りよよの陰後のおをそ
懐を懐くいこ若れ乃乃赤
月影よ一分一赤なる白の上
只らりりくとをくくと唱
初こんき袴う結をたうと
髪乃赤髪をを赤見せう
年くれ髪よよふ乃乃友の教
軌る車とせうぬ赤乃日

成秀 浴通 大柳 惟妙 裕睡 正則 楚江 勝重 草皆 兔苓 正秀 則 重氏 重古 五 廿 則

不三

言れ葉乃下八夜と吹おろし
 呼くるものゆらき夢のまじり
 正幸 江
 有るふつてみき内山とさう
 以てのゆり席をさるる水
 汗噴きくかきくたをさるる
 多ふくきくしと煙管取あ
 風やうと流る終の浪し
 只一はと飛む藤との
 ちししく古き朝の草あま
 笑葉 州
 月石をあまはれく落し
 秋風は細乃さやぐるた電
 西岸の霧のたさし
 重成 香
 斤端のつ子さまはれ
 力あまた力のそらかさ
 長柄は箱かりゆと赤
 柳 沉
 ぼろまはれつとねは
 職人の糸あはさるる
 法 土
 南ありのうめとむら
 香

文考

世里八山と回馬と冬こり
 まるく細くさるる崖電
 冷水
 以ての志乃ぬり子の
 以之
 能る乃梅子さやぐる
 桃先
 代後をり九世の観音
 桃後
 徳人のゆきほとこま
 首道
 あしゆとつて岩の世系
 愚の子れれをさるる
 愚考
 切く付るる菴の三日月
 考
 雲袖の團扇衣善法なる
 丸
 鶴入の巻ハ形うさ
 車
 花子ぬくぬハ二たや
 之
 ありととハハぬらるる
 白幕
 柳
 紀

履くくしと膝よりくろきかきこ
 襦子乃くゆき 味津の曲お
 ちととと 童よ筆ととととと
 おーの松を早守松仕車
 海をこー隔ちあれ志おとゆき
 秋風をこー義助乃墓
 さらぬのあきぬまふたけ
 小流りのあきと衣くくの月
 さぬく此意はるか因忘貝
 乞食とぬくま婦かこふ
 こむむる脊中の雲と折掛ひ
 きらる法を揮 並をこり
 素泊一ツお寺足くけと時と
 荷を履るの半八麻ころお
 糸くくと日向の力れ家盛
 やぬきの糸くいとる 棒
 急化すすめぬと 棟の多
 又黄皮乃保生目か度

履 先 乃 雲 後 車 之 扇 考 此 親 先 後 舌 一 道 乃

中巻

袴くくと帯を便る板家
 作乃と月心をおあし吹 惟松
 約月小慈先く尾とあまし 土芳
 正乃先たる 粒豆磨賣き 雪芝
 二ハ乃更り舞る 細小師 猿 鑑
 屏その敷は海をまに 芭蕉
 瘦なりくち他平く川表 卓袋
 空中の牛を徳本ととき 九節
 嫁ハ此まき振やまつはへり
 杖と系履を移しておく
 一くお字とさるる自松家
 新釣イ箱かたかく此松
 ちちれりりて田よも知る志
 昔も麦粉をさすの 帷子此裙
 立なりく文きて並店の際
 飾掛手くく船母の伝イ箱
 ちん九子花の本陰乃くく
 何平とやととと 北の吾風

帷 芳 意 帷 袋 道 帷 外 琴 芝 九 節 卓 袋 芭 蕉 猿 鑑

庭菴屋よき甚多ししかるは焚
なりしひのりくま子を巻く後
冬柱乃九手母あしよる後
まよくしんも居月呂の偏
持鏡の一番所へつりく様
何房きへもみながさるる
青れ口入那さるる居る市
桑の吾氏のぬりぶ小葉権
間うあまを又たいくる画のうさ
やまふせし一家の巻坂の枚
有明まをく一雨さく信と書
露しる所さるる痛やま
引多てくもさるる道程のつ
独たおくるるさるる外
あししくこ世もさるる貝の壳
いんりくさるるつりく終
片らくと桑の波さるるさるる
板まきさるる土子のさるる

袋 翠 舟 維 芝 芳 庭 菴 庭 菴 庭 菴 庭 菴 庭 菴 庭 菴 庭 菴 庭 菴

元禄七年七月廿八日 桂 維

何きくく来た海ゆく時分
を此りくくさるる雲の後 芭 道
物月歌かきし形造付さる 配 力
桑の輝る月暖藤の敷 望 翠
あささるる楊をわらさるる 土 芳
素扇さるるは袴さるるたり 卓 家
短甚を小サキさるるかや 菴
名ぬくく地下とさるるお 維
焚飯ハワくく中つめさる 翠
おひぬさるるかぬさるる 芳
いんりあま華の要はあひ 伊
ぬりこれ西月をさるる 昔 蘇
指指のこまの書を扱や 力
お襟さるるさるるさるる 誰
山陰と山ぬり村の云と構 庭
能くさるる新乃輝の象 菴
焚きさるる桑葉ゆき庭の也 芳
おりさるるさるるさるる 庭

五十五

梓割ふ川際たる積あけく
日たゞくくくく風やう合ふ
大名乃仇のきさのそとまき
むらひ乃かの都る血乃及
一掃と代を極くまぬ酒の物
あひひ乃ろこまふれさす
まかりはる草屋細工のおる
軸乃あまの極とこれん
帯本中とあまをせそる
干かひひの志ある三ヶ月
祇良ハ沖佐を極くはく
志をくく名くう体心代士
衣をくし旅するを極く
かた一遠の軍の口のきせ
耳ををくく極く極く
かた多乃くく極く極く
大媽をくく極く極く
第乃の細子此来るむ二月

藤 力 聖 維 芳 益 帝 尊 維 道 力 芳 聖 道 維 力 藤

色 意

ちく葉乃固ふまきくを極く
お美ゆまのそとと船 月
冷くと朝の斤をくおのけく
何くくまきよはくハまめ
小四まきにま太の落ハ極く
都をくく川く玉くの縁
あひまの極く極く極く
袖をくくまの親のく代
垣越まちまのくくのれく
善法乃うらハおをてを焚
くくまの極く極く極く
酒買くく春 子福のすく和
まゆくと月の出くく枝の敷
枝は先いあくる町南の純
くくくく極く極く極く
飯解乃ぬくくくくく
まきハけくくくくく
かうりく時の一あをくく

中 氣 生 考 考 川 竹 女 意 何 中 舍 羅 酒 堂 惟 然 交 考 僧 川 孤 竹 ろ の 女

五洲と標よちるを這入ら守
とやうななやと自の危柱
あまくとまゝにたまの茎
雪乃の区一れわりのるる
常賣と隅乃のた連もを
信翁とていふ代もむと
上下乃橋のたるる川の香
くく田の中を遊のれさつて
小まへり不取と程おまう
信の仕かへりもやる常一様
月影とつらつ呼そくの松のまき
杖一本おる乃のりきり
望うゝまのまゝも海のめさる
危乃りくくふ喉何し一
備ちさる獨乃のうまの張さ
あぬまてれ積くくくが
田の水乃の連まきを盛
柳のさく一本みさうのひり

川 女 考 中 行 女 中 女 考 川 女 考

元禄二年七月廿五日

箱

ぬまさうり人もおしや雨
こくさからなり一層あつた
月見とて獵ももあつた
于ぬさうりつとつらぬる
松風よとて森のまのひさめ
響をすくく一連
見たりる湯中のたれぬる
下つたのりてせてまゝに
むらぬのちと程もあきれ
尾の地着よ枕うくくや
入おる鳥の姿も啼も
くくくくくめ侍常響の
肌のたぬまのぬるくく
くみ姿すれてあつた
くくくくく海を以て
あまはく竹の枝もあつた
あまはくくくくく

欽 生 曾 小 枝 生 箱 枝 生 枝 生 枝 生 箱 枝 生 箱 枝 生

あはれくも雲を霞のうねりかき
むらたけを鳥のつとよけ清陵
あまの待たぬ糸梅く里道よ
離るる箱乃多毎川ぬさ
葉乃抱や赤江秋は想あん
けののささるる梅るさのさ
雲を糸の糸あまの角おろく
月鏡しててんきり世後る月
乃のえんし盗人の名に秋の雲
志ううきく門の人の戸抱
柳社ハ柳の美生のさくく
病の愈て成りてくう雲
一ふに結びてん人扶持の礼
何分るま嵐あまの戸漆子
徳くさま心も様と改題約て
うみ切るあけまはにさしゆ
入山のいさしよ嵐くさき風
あまの梅くさき猪の足行
岩りた梅と木持し徳る

生枝良生箱良枝箱生枝良生箱良枝箱生枝良生箱良枝箱

甲の巻の中かかたれそゆ
追刺の砦をけりも秋のこれ
月よ起外乞含の樂
そよ風お共さうり屋の物
翠簾二人うかとも物あし
新ふれてあし柳くさる花れ
折る手透さ紗の羽成
回丸の内もく不このうらぐ
離るる箱乃多毎川ぬさ
長生いけり又君の思原を
細う結いあけりともる花
さら花いり方海の町あけや
酒よいさめる梅の山吹

生箱良枝箱生枝良生箱良枝箱生枝良生箱良枝箱

芭蕉

思ひま本常のや四月の様物
糸の杖つゝ岨の夏むさ
牛のさ乃乳を春日教宗て
かまふふと梅竹のあし柳
備つゝも葉の録々細糖り
ひとつゝもきつゝも明の松
所帯の波のそ身は海葉て
粗飲の情はなれとさう
まは紙は洞をつむ女あり
あふけの糸ふ上の袍く
常らつ葉の思戸は真て
よせつ車のさし侍り

東菰 桂搦 叩端 桐葉 工山 菘 菖 閑水 揖 葉 水

揚今とあそびをききし巻の巻

如行

盃ささむく 瓶飲り
有るは陣北本城と前勢
あふふあふり 庭の砂系
小法門は約引むるあり
椎乃古枝と梅より折る
いちこおま山より 村の面積
老多々々 友乃雪
お喰らうと雪舞あふる物

茶 葉 行

お喰らふみまきく 車返りつ
橙を竜よとをと摘むる山の妙
赤られし 葉人の乃乃
振作らふも梅は手喜の風
三日月神く節白知り
糖をのみ 初川はる花袋
弟は侍乃志す 白鳥る
神即位小 梅白髪と探り
桃く常盤乃 面中の竹

茶 葉 行 系 菘 竹 葉 道 系 菘 竹 葉 行

茶 葉 行 止む

茶 葉 行

生るういふのわがを海流が
 ほろもきて白の雲の菟
 代友乃夜屋よを代月を
 の風呂桶乃の輪を今々々
 那の糟を捨ててはの河の
 きふもはてんくきもお強
 秋の阿もやう一醫志のあひ
 座後静中なる能のけしり
 受着乃くくくくくくく
 施うくくくくくくくく
 麻衣をくくくくくくく
 中箱の何れをくくくく
 何れもかまをくくくく
 つくはくくくくくく
 送くくく村を呼ぶくく
 けくくくくくくくく
 初を乃何れをくくくく
 何れもかまをくくくく

水 田 水 田 水 田 水 田 水 田 水 田 水 田 水 田

十二月九日一井市奥のくく

多の麻衣一宿の麻衣のくく
 履さくくくくくく
 くくくくくくくく
 身麻衣のくくくく
 泉杯乃蓮の上をくく
 障子のわをくくく
 知くくくくくく
 乳を捨ててはくく
 麻布を捨ててはくく
 蒲をくくくくく
 夕之代をくくく
 くとあつてはくく
 小男麻のくくく
 飛あつてはくく
 扇くくくくく
 白くくくくく

一井 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人

乃乃さき毛子の子の足跡を尋ね
 和泉代わりの桶入の名を
 紫垣乃吉さま古ハ破屋を
 傍もよんたり推はくつ
 自家代名してつくる 秋の酒
 繁切泉青の月をひらめく
 長つより西の影乃移る
 満つる母子ハ何と暮る
 山重を乃後の水風林松
 言りし勅置ノみく
 やとうやんたらの岸ハ新屋
 前庭より以て伏美のふ
 山深及も先洞ハぬ舎のゆ
 祢宜ら被りし祢もろく
 在毛 籠も物やおり
 さいこいしくも 田を
 古身他より二白
 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道

夕照

法荷

晴吟の塵を抱ゆる西日
 漱石ありけ 芦の穂代上
 雪の糸袴を隔る松こ
 雪よりはさする石系乃
 八月此為他移る武志
 紫の空をよきとあや
 山ちとるも 流のさ
 志とひ身あやと石造
 夕雲月よきをり 鞠の音
 白き如様のの垣を
 宿をを様のの垣を
 乱まし 髪と玉を
 潤る形人の数も
 何毛髪よきとあや
 梅の月一の空を
 遠つき初し 東の
 みつて代已の
 四十産をり 月を
 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道

下五十二

白く梅をまうしりしれ
 独子
 薩摩乃あわしうる月
 色並
 目録ひくくひり隊列そす
 成吉
 解りたる人此肩より行く
 其角
 夕子の智代はあやむる
 子
 根松苗松探入り幸
 子
 池の橋渡り始ぬ垣結く
 角
 三郎と入帆乃足る屋根
 子
 世の中を馬のふれる葉の煙
 子
 姉の所へ代りてやさき
 子
 ぢみさふ袋の切のそりく
 子
 多を占さく一園の物
 子
 波のぬはるよとくとも
 子
 二番とあし乃はく一侍
 子
 一巻乃連舟をとむさ
 子
 苗代もあはる雨こそあ
 子
 雪の粟代はあはる
 子
 祿直下りてつる妻の夕月
 子

子菴懐人

河子

危月や藤ふく雨の煙を待
 子
 家くまうくのあぬ史の吉
 子
 秋を待つるる乃色
 千川
 すすむる水の酒代試
 源紫
 瑞きらぬ舞あめは懐
 子
 候うきたん坂乃下る
 子
 穢人のあまのきよと振
 子
 まうさのあまのあまの
 川
 入口の燈籠をよむのむ
 子
 きりくひのあまのあま
 子
 舟乗りせとくあまのあ
 子
 怪しむるあまのあま
 川
 依りあまのあまのあ
 子
 食乃清きを冷たむる
 子
 月影のあまのあまのあ
 子
 辰のあまのあまのあ
 川
 あまのあまのあまのあ
 子
 ぼろろとあまのあまのあ
 子

元禄三年九月二日 藤原の叔

不知

聖徳太子 塙 少くも 塙 塙
 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
 初月 西 西 西 西 西 西 西 西 西
 波の音 音 音 音 音 音 音 音 音
 本とひやく 塙の種と音
 酒の音 音 音 音 音 音 音 音 音
 おのつ 塙の音 音 音 音 音 音 音 音
 互なき あやふ 志つ 志つ 志つ 志つ
 いも 志つ 志つ 志つ 志つ 志つ 志つ 志つ
 豊の音 音 音 音 音 音 音 音 音
 竹青の音 音 音 音 音 音 音 音 音
 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉
 層 層 層 層 層 層 層 層 層
 綱代の種 種 種 種 種 種 種 種 種
 島の音 音 音 音 音 音 音 音 音
 上 上 上 上 上 上 上 上 上
 志の音 音 音 音 音 音 音 音 音
 欲 欲 欲 欲 欲 欲 欲 欲 欲

くれおの二兄の七よこ 藤原の音
 藤井 藤井 藤井 藤井 藤井 藤井 藤井 藤井
 彌賣 彌賣 彌賣 彌賣 彌賣 彌賣 彌賣 彌賣
 村乃地 村乃地 村乃地 村乃地 村乃地 村乃地 村乃地 村乃地
 め 湯の音 湯の音 湯の音 湯の音 湯の音 湯の音 湯の音 湯の音
 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志
 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志 志と志
 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立 立
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ よ
 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉
 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲 稲
 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物
 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信
 お 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音
 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊 羊
 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法

蟬鳴を乃あうふ舟家く
現をわしく白乃くくさ
髪そねの必るううお家の言
ををけううううあふちのささ
男の妹くすううとちあふく
なみく大橋よ白舟をほと
老ゆきを計乃舟あのをむら
みぬく仲のさ月くささや
あう屋小舟をさうの舟とさ
ぬきをすうさく枝ささめー
甲斐伝流月をあうさよほ
つあをぬささくのあふ初穂

右身仙よ白く是

舟 坂 色 又 色 葉 坂 舟
土 波 色 色 又 色 葉 坂 舟

木枯ようある昌輝さく入陽礼
毛をひく鴨とのまる廻板
掛乞の中ねんは袴さくく
さくろくくハ本履さくく
梨の枝おろく解と芳の月
桶ふるさこさ草かくのあく
秋風よ紫さくゆの宿
蕭のりくお深入り
六月の月おとまの木の
手取乃入一筋縄ゆさる
笠袋斗そく仕置る海志宗
雲西乃筋の罝る山降
藤をそのこまおとけ藤の陰
俵よ豆乃あせととく秋
月代もくくさ里の難き漆
手纏ひくくさる代吸く
盆ハさきくさぬふ盛
身け上りのあふあふ

酒 壺 翁 山 舟 大 舟 千 川 翁 壺 拵 川 舟 舟 柳 翁

月よりとていそくやみり村野
 小雲のか〜柳の 片山 翁
 男麻池裏のあき万 子指く 以菴
 舟さき白く〜海の ちる川 元柳
 泊まき遠乃板や七一里程 西寺
 襟よお〜こむた〜ひの餐 法勤
 先生くあ〜まむ日多う 五月雨 成の
 交際うろ〜一菓元乃花 川
 蓋さゆあ繁ゆう心手難けけ 翁
 む〜く〜元き〜い〜い大酒 花景
 子の能ハ〜穿敷重〜成ふ〜 柳
 の凡台らるる雪の降か〜 翁
 ぬきき葉外か〜一むま〜と〜鶴 翁
 傷寒や〜乃あ〜あ〜あ〜 翁
 伊豆乃海味漬は舟と僧令 川
 是と夜乃法〜一室を定し 翁

才あ仙二句ふ是

弥後五白津〜 才あ仙

文月や六日七巻代船よ八聖

霧をのき〜尻相乃一葉 花栗
 約霧小食勢 網 立分く 華良
 夢の小舟をえ七上り 眠 鶴
 鳥啼むく小山と刀を小う 此竹
 松乃乃る〜一葉 僕く杖 杖 布囊
 夕嵐庭吹拂よ石のちり 右書
 多〜い〜い〜い〜い 海〜い〜い 翁
 思ひ〜い〜い〜い〜い 翁
 きぬ〜い〜い〜い〜い 翁
 敷〜い〜い〜い〜い 翁
 鏡手掃の 翁
 的もる水朝音い月の交爲く 栗
 藤門〜く〜あ〜あ〜あ〜い 言
 石打ま〜く〜あ〜あ〜あ〜い 臨
 多川〜く〜あ〜あ〜あ〜い 栗
 志の流甚候〜く〜あ〜あ〜い 年
 蝶乃羽〜く〜あ〜あ〜あ〜い 翁

香雨の髪利児うまみこま
香の色くくましくけ文
良 意

右字

星の青月原の駒臺く為後
色香のくくましく初州の系
色良
片のくくましく布つこり
色良

四方十句コレレリス

秋風くく父の穂 立
かのそと錦の自捨の
後て継をくく必乃古堂
稚穂く小枝の冬の名を
雨乃あくまの月と古堂
黄をくく車もあくま香の上
一むくく人をくく飛ぶ
金山徳く小砂を捨つらん
科のむくくく雪陰の庵
也 右 香 意 良 也 右 香 意

爰るけ百そま果の名を捨て
人言くくましくくの所系
松柏着く霜の着まなり
子を射さやくく鶴乃床
傾けま代徒をぬくく吹の
従古乃月少くく台多し
橋皮むく老の尻乃新雪く
志くくましく家の海ふ手於屋
塩濱の孤村乃烟を瑞の
居あま波のま片くくま
かくましくく地着の穂子も
藤鷹のくくく 里乃ま外
後と下るく 片くく物陰
他階を尋くく必乃窓も
片本紙 ぬましく 梅の老生
良 意 右 也 香 意 也 右 香 意 良 也 右 香 意

信房松屋堅房く電良系
全五斗 骨玉持

唐冠を青け結帯を門簾
遠とる子乃るまに居所
裏合を板敷のくろ 葎の岸
坂乃れををひく母を赤の赤
の赤くく母は足輕の遊りし
はく酒のそ赤あ乃あ
とくく母は風のある赤
稻笠人け結帯を赤や赤
月見のハ親は赤くのか赤か
とほきく赤あはとこけく赤
伍り割ちあは赤斗ハ研勝く
仕計くく母は 舞方の客
回張棒の向を白乃稻の赤赤
と赤くく赤くく赤の赤唱

右分仙は四白あま

坂、道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道

水多や小船のいさじ二段漱

湖風

柳をまきく岸乃かり株をまき
兄しまらる切仲乃崩ぢ 伝達
力の柳くくく 伏籠 利手
食傷の腹を平く朝の月 風
登座く揺る赤乃友在 道
小構く座をま程入る如く 松蔭
襪一文く下赤を信る 牛
落葉乃立の黒きも踏く 芝
糸の赤ハ殿の 敷 袴 単衣
名を何しの子信り今子信の
古きを解りくく赤と物ん 風
小さくして柳揚を赤の赤の 牛
釜を焼く推う喰ひ初 蔭
月影の白く仙の甚坐之 道
盗人くく昔の 神 道
皆掛の赤赤のかは花の赤 道
くく 踏 合 け 遊 打 網 風

下

け乃舟の人の形あ 小秋の所
 廻乃留の事よりかゝる葛泥足
 月を心考妻のこあるまの事
 ちいさき赤をゆきあ波 交考
 毛お羽織をへて花う遊力
 酒くみみのやある後 癖 之乃
 河流の男節白の座立立者 車庸
 堀乃玉信より赤の梅ちり 酒在
 線多と春の宴の他よなる 理止
 急流次乃條代跡る二月 龍柳
 兵乃宿止の赤の袖あし馬 足
 かくささ草よりある松風 翁
 ちくくと山田の稲はまふ心 考
 地乃乃埋取結の想し交 乃
 仕りなき身ハ菜あうる釣の月 止
 極絶乃紅のそ川と入こむ 出
 夜ぎよ暮乃芝川吹まき 表
 川側見取る醫玄のこまのさ

白紫ぬく林のりやきくくは
 入目とまきくは西志乃月 之道
 あま極乃縞をきつ結の事 珠破
 刈共らうらかつみ乃紫 益
 河風より竹の衣のかくくと
 麦のやう福をうく冬危 乃
 作とくく一忍帰ら縄白をこ 意
 願ほ共ら急舞のの奥 乃
 久し手根のあゝあきまて 乃
 山を平の増の明る秘意 乃
 かやと岩より踊福々 乃
 月影の夏の足毛を垂掛て 意
 綱と縞をふくまきうつ 乃
 そのくくまぬ織のまきま風よ 乃
 人もはまの赤袋たきま 乃
 何くくまもえまぬあゝ留 乃
 蒼菜とくくまは花かきく 乃

杖の根とちちるあしとふ樹の根
 月まのほくらやんすよまき 車庸
 西の山よりなるとりれ居啼く 酒堂
 いささ牛のさく歌くちや 海刀
 男の名まんまや野入吉世もた 漁叶
 小社とわけてわゆる大年 指女
 使やる所とまると折ねすれ 支方
 型てと医者のもえとまきよりり 菊
 拭ひしうと熱くの根きりりと 腐
 ちうけおくは年あゝの 枕
 紅より玉岩うすてまきかきま 力
 まくたうたうくいのせくらえられまひ 考
 麻のまぬね八岩ちんう石の枝 此
 雨まれ月の細き川すち 庸
 大ととくく茶師を下るけう嬢 孫
 七枝まていよりけいひりやち 右
 又せまのち鞠れ赤ぬむやま 堂
 小鼓まきりし令枝れま家 於

おの

ちんちん松よ松と石を赤松の種
 一羽別りし千鳥一群 とき成
 枯るよよいなく松のみよりり ちんちん
 田中乃乃たれあうまきゆく 信之
 月毎く巴うああをるる 高 泥舟
 秋風上流門のけいせき 水萍
 露の糸跡をとく空校の音 風泉
 傳ふと名をりし葉のまを糸 夕氣
 藤戸くかあうけけけけ 苔翠
 傾城うけとかくまゆ本の 瓶筆

松松よよいあまきるるみまね

鐘ありしあまきるるみまね
 ちんちん小ねちちちの十子風呂 評六
 なるの細織も四又のうら 芭蕉

唯晴く秋ハ舞の月お飾く
榜までおしとくせつ初收
縹細干場と女宮の籠より
編笠紐より入戸と何ゆ
祓明の草も影いとひらき
と云うはと地中もあや

那末六良邦

あまき器

如風

秋しや露葉の比乃露葉
洲士乃、菊と手折る梅
市車代習とすも言くま
海を被くくくつと夕月
矢中代夢ほうせき霧の風
かしこ乃とまふら代露屋

色道
安信
車辰
自笑
知是

あ仙あり思えとあり

きん虫器

知是

梵飯や伊良古の雪よ散る
砂さ雪くくく一秋足の端
松をぬくかみ君う子けりて
いへう鳥帽子乃ぬる妻は
成年馬代あらぬ暖さ
思とかくと花掩露の月

誠人
之
意
人

あまき器

片言

幾葉紫その花神とわらふ
後藤乃雪をとんよあう
乃の月若くあつたく
里の踊りて燈菊折る

色道
知是
野水

雲思菴小様ねくく 誠人

吾落やはく小様とせぬ
雪とくくく花はくくの松
誓の子の縁を告る国吹さ
脊えんう車う踏こは花垣
かよふ世乃月をあやハ
芳妻乃貞と通して年吉

知是
色道
人
是
其

あられとてはや精一金全り 如行
ねれ文とまて竹さゆらまう 夕道
亦はつて撮とまてぬ疎隙と 荷兮
けのけやまことゆり所ま魚 野水
はらうて山さうくまぬき月 芭蕉
後つく杖の階子ほくく 未

雲水庵

とまは

終家や雀ふらふ子脊戸の林
蕭々しく尺の響き兼州の如 知足
折波と波乃編橋響とあて 安信
風呂焚ふけ月乃曙 兼
松垣のあるいさすふ鳩の色 足
七月お下りく子拍つ 信

羽色

いふ足と後面うしとあはれ
階かきあうね 枯糸乃松荷兮

本職州下若小燈と茶釜して重五
松等より玉と扇月と新雪杜必
紙は塔 かげん 月を海翁
いさう小橋とすうた岐阜山 壺水

そまの通すくぬまうき

西へ入日尺をを衣菴子

旧保

深川と萱坊く燈と響ふけ
春入如小橋のあ——河と 壺水
初寅のそいぬ市は日和けて 一田
約とく月入ま右やのこり 琴音
牛車つまうき響のたやまき 壺水

おき里

壺里

雨降く粟乃を咲く徳ん流
以川是乃物子啼おつる塚 等躬
夕食くお物ふ響は月出く 色兼
秋来よまうと布ぬくるく 壺良

下三帖

寺島長助事書 七巻

啼しきや海よ入るる宮上川
月張ゆをなほ波のうき海松 今道
黒階の影け度の空のゆく 不玉
禁下と雨よるらん 雲とこれ 定連
梳より乃朽散他里て所と侍 善良
影しきまうけの雪月八油火 任曉
ふ様姫乃をよきき 恋衣 扇風

羽鳥くさる 會竟

つとねのよの世は輝ゆく山寺
秋の志事まをくやま 三日月 色為
城傳ひよ東のらをあつて 不玉
以てし終るるのあ—— 依 善良

龍後宮田細川 兼菴亭

子多 七巻

葉楓よいつきの色とまおく
秋入んきくれをあきける月 棟雪

伊事のまの夕影と秋のいきて 東也
るまぬき—— 高敷のト 善良

七巻

小細はと柳 橋—— や海士と妻
わくかきより 仲乃やあつら。
三日月のまの影舟ぬ秋の来り 七春
いそげと菊の下葉つと勢る 善良
服屋—— 羽織又きり州の影わ枝
板乃四方とめくらをさし 牧童

犬艸

芽生しきる二葉と花の橋の雲
白乃あきくくつれ 帯の色 色道
蛸もれり—— けらと南極く 志未
人の涙くく約 福 橋 善良 艸
石のよと度龍脚のめ 善良 乙別

元禄三年壬申書

土の申を以てよき社

かきく免

其角

小傾微れく存中ハ子の言
既中とうまふ板乃あき物漢
鳴けう止 傍の却の希くして 色道
か些家こくろよなきくくく 暮松
集巻をひそく小浮く市の中 盤子
以川てりゆまを師のけり 史邦
弁散乃禁こくくま子月の高 去来
胎流くくくく 早橋の朝風 大州

元禄七甲戌年

第且快

其角

くくくや中一の候ハ月夜
平紅毒をくあき 玉成り 以我
春もくく道乃子あやくく 岩毎
山くくくく けあく風の所 松風
独あくくをあそくくく 吹子川 彫棠
改原をくくく 秋は秋くく 横江

くくくくくく 緒乃きけく 色道
帆張ハ合くく 松の夢 仙化

為

秋のあくくく 小あきくく 唯止
あけくく 壺ハ州 花咲く 惟吟
以川もくく 壺ハこのむ中 報 酒巻
以川もくく 壺ハこのむ中 報 酒巻
横の枝とあきくく 色道
清川よつあき 壺を 壺くく 青流
火乃と壺ハこのむ 壺の壺あけ 為

色道

山はよき 壺すくく 壺くく
むくくく 壺くく 壺くく 壺
木くくく 壺くく 壺くく 壺
まはくくく 壺くく 壺くく 壺
細くくく 壺くく 壺くく 壺
如行

くれてはあまのくさるわさる乃工山

蘇幻住菴をわてふ哉

越さまの時ふらふと 色直

あはれや白き障子のととらう

炭の火をくくやきれをほ

五月の月毎とほみは川あま

はくくくと叫ぶはあふら

初あつと船まうはつとあは

類蟹利てみちうひより

猿の意のうをする雨をれて

ま〜と〜さ〜い〜乃乃乃

知くはさねはわくは月とほ

わなれぬやうはそれまう

蒼天とたふあまのせらと

対面して次へ西とさつと

工山

移人

支考

湖水

舟三

桃林

聖函

利雨

越人

枕草

夢想之能諧 能青

捧く二月中旬の山花

て下のあけあまや

雨裏む古藤ひろく流る

志なき藤を香をあゆ

雲乃戸のうは鳥の本代

そ〜若有明のそ〜あ〜

小里乃〜と金箱の裏

杉尾

仙四

龜

葱代

杉尾

而已

靛草

貞享四丁卯年

翠白

時面くは藤より重んずるの菴

火煙乃繁々徒を流る人

松風乃まはるる鶴とあ〜

朝香はく〜湯の山は月

種ひ〜このま〜秋の夢

著れ徳園をゆ〜み〜

後子と〜の〜

色直

溪石

口崎

長角

み〜

虎宮

候ニッ子ぬえか〜その帯
若糸の土境よ子の目代松ひん
後々ぬ〜も〜く務まらふ
不 道 白

葉柄と噴く〜文ま〜法信々

芭蕉

武士の大柄〜きけり〜れ
一〜りり本〜〜れり
分ま〜り〜松のぬれを困えて 舟竹
大〜り〜る古題ぬれ〜り
おの葉乃す〜るか〜て月の巻 舟
後〜と〜てゆふら〜り 舟

叙外

本〜り〜る〜と〜り〜る〜ん〜り
何〜り〜る〜り〜り〜り〜り
えい〜り〜る〜り〜り〜り〜り
馬〜り〜る〜り〜り〜り〜り
越人

情と明〜り〜り〜り〜り〜り
蝶ねい〜り〜り〜り〜り〜り
杖芽

芭蕉

残衣のや〜り〜り〜り〜り〜り
下〜り〜る〜り〜り〜り〜り
ほ〜り〜る〜り〜り〜り〜り
板を〜り〜り〜り〜り〜り
夕〜り〜る〜り〜り〜り〜り
馬〜り〜る〜り〜り〜り〜り

叶未ぬのり〜り〜り〜り〜り

梳あ〜り〜る〜り〜り〜り〜り
舟中〜り〜る〜り〜り〜り〜り
芭蕉

夕〜り〜る〜り〜り〜り〜り
今〜り〜る〜り〜り〜り〜り
〜り〜る〜り〜り〜り〜り

夕〜り〜る〜り〜り〜り〜り
日〜り〜る〜り〜り〜り〜り
〜り〜る〜り〜り〜り〜り

乙舎年々桶の本の中
まゝして花さくは月とてつ 色蓮
月があれまゝにまゝはるは
ハワ〜まゝ子の秋はまゝ 色蓮

いさ〜まゝを〜さう入るまゝ
硯のあつ〜はれぬ 花さく 色蓮
杉行 葉の結〜まゝまゝは 怒風
二十余年 まゝれまゝまゝ 野人
あは山のり〜八月のあまやら まま
故まつまゝはまゝまゝは 胡紅

いさ〜まゝまゝまゝまゝまゝ
う〜れてまゝまゝまゝまゝ
梅福のまゝまゝまゝまゝまゝ
路通

市はまゝまゝまゝまゝまゝ
酒乃戸あ〜く〜のまゝ 梅抱月
物息まゝまゝまゝまゝまゝ 杜園

花乃花のまゝまゝまゝまゝ
お〜やまゝまゝまゝまゝまゝ
七夕はまゝまゝまゝまゝまゝ 色蓮

百はまゝまゝまゝまゝまゝ
本はまゝまゝまゝまゝまゝ
け〜〜まゝまゝまゝまゝまゝ 東若

木下... 東夏

如春

梅後く日影... 色道

古き

其留士や... 色道

素堂

深きぬ... 佐圃

古の世の古きと... 為

月やその... 為

旅く... 角

秋風

あきく... 秋香

写あかき... 冬

面か... 知足

主人

樹き... 客

貞亨丁卯仲秋末五日

口之圃に母よ力そ
あらんやう或はまよとくはる
手よ今入るべきとまはあり
紅ひて他号と改め古座とふよ

離るして名をたとのまをれ
名極乃まろくことまろく
當れ痛ハひりま戸とせを 名

作そのまをるまはやくし候て
名他一まは候てれまをるまを
まろくまをるまはやくし候て
まろくめとまをるまをるまを
らまはやくし候て

曾良

藤衣早苗まはやくし候て
あやまは候て あやまは候て
交りのまはやくし候て

あま里

あやまは候てあまは候て
市の子供のまはやくし候て
日あまは候てあまは候て

西流まはやくし候て

まはやくし候て

あまは候てあまは候て
まはやくし候てあまは候て
あまは候てあまは候て

善伝亭

まはやくし候て

あまは候てあまは候て
あまは候てあまは候て
あまは候てあまは候て

酒

あまは候てあまは候て
あまは候てあまは候て
あまは候てあまは候て

きよみれ隣ありや 牛古根
冬はしー 菴々 山 雲の標 芭蕉
月とるふふふうう 馬を連て凍 鹿菜

とよ

うら山し 浮世のわら山さく
言 酒のこゝ家 細根 古根 夕空
人足乃 と言うそ 中を去ゆり 玄米

おき異

芭蕉

冬にまや 言ゆく 宿の言新
ちくくく 言乃く 家即 牛 山店
杖持 方杖く 糸 女く 屋うて 史外

世を仙とて 依の白きく 下 里とて

里圃

いさこ 立 香乃 山 中 山 可 乳
冬 乃 中 の 言 の 言 なる 言 言 治 園
古 根 の 言 言 言 言 言 言 言 言 言

世を仙とて 依の白きく 下 里とて

松風

雪の松お 山 言 言 言 言 言
日乃 ち 家 言 言 の 言 言 言 言 孤 屋
下 者 と 一 舟 言 言 打 言 言 言 芭 蕉

仲春初之 夏 想

中

為 弟 菴 乃 山 言 言 言 言 言
神 乃 免 言 言 言 言 言 言 言 言 果 申
言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

世を仙とて 依の白きく 下 里とて

梅 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言
土 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言
言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

羽

夏 時 言 言 言 言 言 言 言 言 言
言 言 言 言 言 言 言 言 言 言
言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 起 人

昼つて登かむ大の森通て 野仁

くそ成

百高や 杉の本ねるよいろそ子
笠甲と杖くわう山の家宿化
障くいといと離の解れて去来

芭蕉

湖水くろきり新く比石のま

信子まつまけいにく 取 人 文子

分ちちや友うくくく又まて 伴六

具用

春嬌く世ハ世多くくちくく

あききくくくかけくくく

か代の多おき年うわさよ

芭蕉

卯くむと女を互名り冷まーれ

香きえおふみくくくく 具用

いろくれきとくくく月化て 尚也

芭蕉

枯枝く鳥の多くく秋の多

鶯くくく 膏乃をく 里吉巻

答山

柿の横むくく 松乙本代巻

はくふくく 高乃巻四十一 芭蕉

知足

夏草く東海まくとく 云三日

美もくくく やん産の布代巻 芭蕉

季子下

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

月ともみちを酒乃く 會芭蕉

芭蕉

古池や 楳といくくく

芦れくくく 乃乃果其角

雲校

宿美くくく 乃乃果其角

くくく 乃乃破蓋 芭蕉

花をよみよ梅の葉の氣味
葉の陽よ強き言れいよ言 色直

色直

ふりうくく三枝家々やめり色
らんゆやく買ひり物月の月、

是れ初月の文也なり 本因

秋のこしらひ色くれ言をれ

秋のこしらひ色くれ言をれ

本因

のこしらひ色くれ言をれ

如舟

やうくふあやふよとくの色直

四枝よとあやふ 葉乃枝記 色直

色直

松崎の舟の船列 色直

月直と文のあやとれと色直

怪乃くくくく色直 色直

言の角たあて

色直

花あうやんくの宿乃はと色直

花乃宿とのそく経夜の色直

色直

物まよあやふはあや別れ

つらくあやふはあや別れ 色直

色直

花直とあやふはあや別れ

多花はあやふはあや別れ 色直

勝延

花の咲きあやふはあや別れ

秋のくあやふはあや別れ 色直

この女

時直やあやふはあや別れ

痛なき花直やあやふはあや別れ 色直

色直

花直やあやふはあや別れ

花直やあやふはあや別れ 色直

尼とともなふ子とち修の形如
あつたをなす福あつた又新色草

本因

終はくは積りてれよみわく事
多れつとてて風もはく事

香川

勇唐十あくく冬冬の指外
小春よりそげうこくみの虫色草

とまを

あやとらる海や海くあやかり

本導

一物志川もはも冬冬の家ま由
春風や夏の中りあれ者

乙羽

その戸や日まてたれ一菊の酒
あやとらるあやとらるの梅の月色草

くまを

月代やひさしををを青の宿
藤志しあつたむしりりりり正秀

曲家

葉種をんむしりの梅や又藤
管色草

珠項

いりくの若むつうや春の草
うまゆく藤乃夏公覚ゆる色草

色草

あつたる入秋実ほとあつた
角のとうら努力半もあつたの土芳

珠碩

赤んく今一はのほ機機
かりしあつたる公家の振色草

とまを

あつたるあつたるあつたる

あつたるあつたるあつたる

あつたるあつたるあつたる

書芝

新くや雨声は山宮霧のこゑ
松をみたりやぬねむし 色道

山寺や中しつら寒く春の雨
猿鹿と新しき山の曉待 知足 色道

櫻木のあふもを思はふ外
あまのあををよつとく 秋風 色道

心地のくく起例へまの年を
すく 色道

くすくすの心こころとまの松外
むしやまの年うまのあを 起例 色道

松をみたりやぬねむし
杉葉のあふもを思はふ外 色道

如行、旧昔は松崎早の如行
まねきよは松のひは松やと松外 如行
白人ふくうのねれさく 翁

貞事のけりや熱田の社、落て
神事の系を体く 色道
まねきよは松のひは松やと松外
まねきよは松のひは松やと松外 相宗

孫子の路へ越えらるるまの
松をみたりやぬねむし 相宗
福一つのみは松のひは松やと松外 色道

湯居くつなぬあふもを思はふ外
あまのあををよつとく 相宗
心のまのあををよつとく 相宗

縁のあつく 猫乃のま白
人あぬ中とら 燈のまを答
師を乃日教おる 指と師

鐘つくく 鐘一 古寺
旭よん山松よ香の 障あゆく

村乃出 産り 華く 痛家
嫁とるに 女とらうて 指とあ事

暖うく 遠の 葉師 ぬいりけ
あつ一 尺のく 返と葉建

池乃志 名う ぼと一 尺の 燈が
暗のこ 代中 うま一 尺の 籠

佐々くを こと 市乃あきく
大和 依入 日ハク 中とる 尺星

屋 補乃 志と かつら 故立
まけ 少く 産ハ 橋の 趣 明て

舟 橋う かつら 山の 舟 衆
大 根と 細 師よ なる 杖 寄一

産 ようく 産 火あ たら たら 小
う 秘 女 尺と 玉乃 ぬい きの 尺 衆

枯 とも あり みる みる 髪 口の 悟
隠 色 け ぬい みる 其 陰 口の 位

飛 山 や あり 一の 山 や 付 山 や
ら とも 碑 け け なる 尺 衆

雲 乃 乃 八 まる 山の 月 雲 く

芋塚返り 小男麻の角

とさかきく晴し〜とさかきく

及くえ多れ小伴がよ

其乃右のるみ〜きはつく

世の恨く〜六位の名もせ

松を通小庭のあ〜

甲乃徳別〜くむをせて

藤乃柵〜きをるあり

喜代辰のあ〜とあうり

板乃芋液のあ〜めり

石ぬ〜おとさふ結を撰ふ

夕白〜あり〜くをさぬひ〜る

板のあ〜く娘つら〜かき藤

人勢の仲〜何を位や〜ん
程〜と〜あを〜あうり
〜と〜文つ〜返〜笑れ〜
鹿〜川〜名〜恨痛の根長
〜洋〜言〜あ〜と〜や
お〜ら〜名〜名を忘
海〜名〜あ〜と〜葉
板〜ら〜父の一齒の〜
ほん〜と〜地〜地〜
嘆〜は〜あ〜す〜
す〜の〜を〜
向〜の〜人〜と〜

以くく世とよむ子座のうら
 二町何と西は碓乃さゆら
 板の能れ豆く成ふく
 幸さ姓は位持は指押むま、
 小伝ふらういかにさうおれ
 新解の繪とよまはらるは
 わるゑハ色紙とらるるさう
 文司うは月まはれらまらう
 こぼとさめてまらふさり
 琴う有て無すは入陸の畏
 仇なりろく暖のさゆ
 又級めさるた、石とさより

京江茶圃寺西東八

出指物細工所湖雲堂

近江屋利助

